

社寺参詣曼荼羅の世界

法輪寺参詣曼荼羅と嵐山図

岩鼻通明

法輪寺の十三まいり

洛西、大堰川の右岸、嵐山の山麓に智福山法輪寺の伽藍がそびえたつ。法輪寺の本尊は虚空蔵菩薩であることから、嵯峨虚空蔵とも呼ばれ、十三まいりの風習によって古来、洛中の人々の信仰を集めている寺院である。

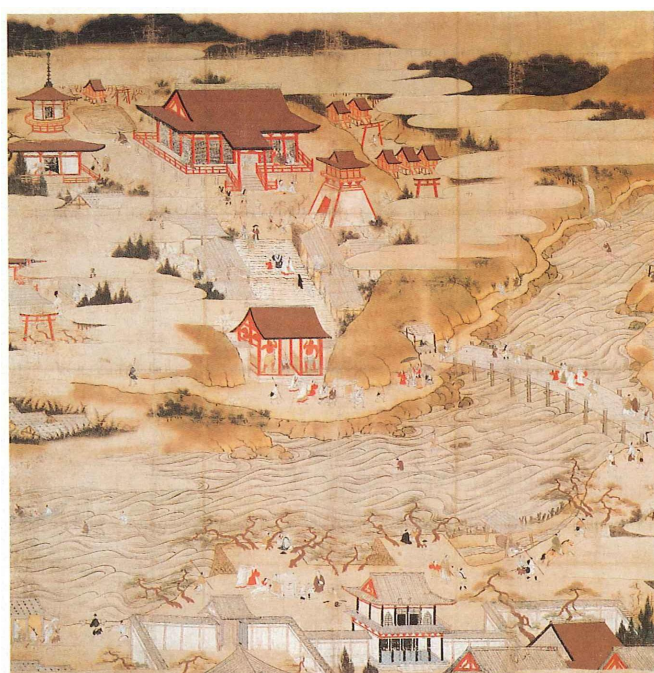
十三まいりとは、旧暦の三月十三・十四日（現在は四月十三日が大祭）に十三歳の男女が本尊の虚空蔵菩薩に参詣すれば、福德智慧が授かるという習わしである。昔は、境内で十三種の菓子を買っており、参詣者はこれを求めて、本尊に供えた後、子どもたちに食べさせたという。ただし、帰途、渡月橋を渡る際に後ろを振り返ると御利益が消え失せるとされる。

この十三まいりの成立を論じた中村雅俊氏によれば（注1）、この習俗が確立したのは江戸時代の天明・寛政期であるという。氏は近世京都の名所

図会や案内記等の文献史料にみえる法輪寺の伝承を詳細に比較検討され、十三まいり成立の背景には、日蓮宗と結びついた京都の職工集団の信仰が存在していたと推定されている。

確かに、十三まいりの風習は明暦四年（一六五八）の『京童』等の近世前期の名所図会にはいまだ登場せず、中村氏によれば、寛政十二年（一八〇〇）成立の『年中故事』に、「三月、法輪寺十三参（中略）是の参詣古きことにあらず、四十年余りにて、近年別して盛んなり……」との記載がある。では、果たして、本稿で取りあげる法輪寺参詣曼荼羅に十三まいりの習俗は描かれているのであるか。

難波田徹氏は、法輪寺参詣曼荼羅の画中に描かれた参詣者には婦女子が多いことから、十三まいりに関係した参詣風俗が描かれていると考えてならないとの指摘をされており（注2）、福原敏男氏も、「二王門より本堂に登る石段には、女子連れの



法輪寺参詣曼荼羅。法輪寺蔵。平凡社「社寺参詣曼荼羅」より。

女人の一行があり、十三詣の風習と思われる」と述べ（注3）、本図に十三まいりの習俗が描かれているとの見解は定説化しているかのようである。

ところが、本図の作成年代は江戸初期と推定されており（注4）、そうであるとすれば、前述の十三まいりの確立期とはかなりの年代のずれが生じることになる。本図の作成年代を江戸初期とみて妥当であるのか、また、十三まいりの習俗を描いているのか、について以下で考察を試みたい。

柳橋水車図と近世初期風俗画

法輪寺参詣曼荼羅の画中、大堰川の左岸、渡月橋の下流に水車がひとつ描かれている。大堰川の水車については『徒然草』の第五十一段に「龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民におほせて、水車を造らせられけり」との一文があり、すでに南北朝期には大堰川に水車が存在していたことが知られる。中世の用水路として著名な桂川用水は鎌倉時代にまでさかのぼるかと考えられているが、この用水路にはいくつもの水車が設けられていたのである。また、永正十五年（一五一八）成立の『閑吟集』には「面白の花の都や……西は法輪・嵯峨の御寺、廻らはまはれ水車の、臨川堰の川波……」との歌謡がみられるという（注5）。

したがって、臨川寺前の水路に水車が存在したことは史実とみなせるが、なぜ参詣曼荼羅の画中にまで水車の表現を取り込んだのであろうか。

そこで、景物画・風俗画のジャンルにおいて、水車を画題とした絵画を探してみると、柳橋水車図と称される一群の屏風絵の存在することが知られる。この柳橋水車図は近世初期、桃山時代から江戸初期にかけて大きな流行をみたものであり

（注6）、おそらく、その影響を受けて、法輪寺参詣曼荼羅を制作した絵師は、渡月橋のたもとに水車を描いたものと思われる。そうであるとすれば、本図の作成年代を江戸初期とみることは、ひとまずおおむね妥当、である。

大堰川水運と渡月橋の中島

大堰川の水運は古くから利用され、丹波材の筏流しは古代の平安京造都をもつて始まったとされる（注7）。法輪寺参詣曼荼羅の画中にも、渡月橋の上流の左岸に材木が数多く積みあげられている風景が描かれている。また、室町末期作成の洛中洛外図の町田本や上杉本にも大堰川の筏流しの姿が表現されている。

これに対し、法輪寺参詣曼荼羅や狩野永納作の「嵐山・清水寺図」（元禄頃の作成）には筏流しとともに、大堰川に浮かぶ川舟が描かれている。大堰川の上流の保津峡は水運の難所であり、慶長十一年（一六〇六）の角倉了以による開さく工事の完成によって高瀬舟の運行が可能となり、丹波と京の間の物資交易が発展したのであった（注8）。したがって、この点からみれば、法輪寺参詣曼荼

羅の作成年代は慶長十一年以降と仮定される。

一方、渡月橋は往時、現在地より百メートルほど上流にあったとされ、慶長十一年に現在地に架け替えられたと伝えられる。前述の狩野永納作「嵐山・清水寺図」や、安永九年（一七八〇）作成の『都名所図会』の挿図（図1）を見ると、大堰川を渡る渡月橋に中島が存在していることが確認できる。

ところが、法輪寺参詣曼荼羅や洛中洛外図の町田本、上杉本をみると、渡月橋の中島は描かれていない。鴨川五条橋に中世に存在した中島が近世に至って失われたのは反対（注9）に、大堰川渡月橋においては、近世に入ってから中島が生まれているのである。この現象は河道の変化とも考えうるが、やはり慶長十一年の渡月橋の架け替えにと関係するものではなからうか。ただし、こう解釈すると、法輪寺参詣曼荼羅にみる渡月橋の表現は慶長十一年以前の景観ということになり、先述の仮定と矛盾することになる。いったい、どちらが正しいことになるのだろうか。

名所図絵にみる法輪寺

この矛盾を解くために、ここで法輪寺の歴史をひとくことにしよう。『都名所図会』によれば、法輪寺は天平年間の建立であり、元は葛井寺と称したという。中興の開基は道昌僧都であり、弘法大師から真言の密法を伝授され、当寺に参籠した際に生身の虚空蔵菩薩の顕現をみて、本尊の虚空蔵菩薩を刻んだ。貞観十六年（八七四）に阿弥陀堂を改めて法輪寺と号したという。

法輪寺は応仁元年（一四六七）、応仁の乱で類焼し、慶長二年（一五九七）に至つてようやく後陽成天皇が法輪寺別当に対して再興勸進の綸旨を発給し、同七年堂舎が再建される（注10）。

しかし、幕末の元治元年（一八六四）の蛤御門の変の際に、またも大半が焼失し、現在の堂宇は明治・大正期に再建されたものである。

では、法輪寺参詣曼荼羅の画中に描かれた伽藍はいつの時代のものなの、であろうか。近世の法輪寺の境内図が天明七年（一七八七）刊行の『拾遺都名所図会』に収められているので（図2）、両者を比較してみよう。

まず、大きな違いとして、参詣曼荼羅では本堂の右手前にあつた鐘樓が近世境内図では本堂の左



図2 嵯峨法輪寺の図。『拾遺都名所図会』より。

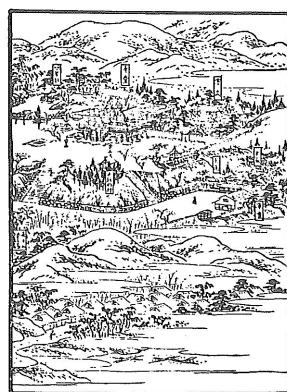


図1 嵐山・法輪寺・渡月橋の図。『都名所図会』より。

手の小高い丘の上に描かれており、本堂の左脇に大きく描かれていた多宝塔の姿もみえない。こつちも境内の景観に差異がみられるとなると、法輪寺参詣曼荼羅の作成年代はいつの時代と考えればよいのだろうか。

法輪寺参詣曼荼羅作成の経緯

参詣曼荼羅は戦国期の戦乱によって荒廃した社寺を復興する際の勸進に使用された例が多いと想定されている。法輪寺参詣曼荼羅の作成目的もまさにそのためであつたと考えれば、作成の経緯をスムーズに解釈できよう。

すなわち、慶長二年に再興勸進の綸旨が発給されたのにもない、参詣曼荼羅が作成されたとして。もちろん、堂舎は未完成であるから、何らかの完成予想図を示す必要がある。そこで、応仁の乱で焼失する以前の中世の境内の景観を描いたのである。中村氏の著書の本図の解説には「智福山法輪寺旧全景約七百年前」と記されており（注11）、おそらく寺伝では中世の境内図とされているのであろう。

そして、この参詣曼茶羅が絵解きをされ、勧進にフルに活用されて、無事、慶長七年に堂舎が再建されたということになる。ということは、法輪寺参詣曼茶羅の景観年代は、背景としての嵐山、渡月橋、大堰川等は慶長年間の景観であるが、法輪寺境内のみは応仁の乱以前の中世的景観が描かれているという二重構造を有していると解釈できる。

残された問題として、大堰川の川舟と十三まいりの表現がある。大堰川水運については、法輪寺参詣曼茶羅にみえる川舟は参詣者と思われる二人連れを乗せた小舟であり、ことさら角倉了以の大堰川水運と結びつける必要はなさそうである。

一方、十三まいりの起源を慶長年間にまでさかのぼらせることにはかなりの無理がある。確かに、法輪寺参詣曼茶羅の画中に描かれた人物には婦女子が多いが、一般的に参詣曼茶羅には多くの参詣する人物が表現されていることが大きな特徴となっている。婦女子が描かれる例は他の参詣曼茶羅にもしばしば登場するわけであるし、京都を間近に控えて、桜花爛漫らんまんの季節には実際に数多くの婦女子の参詣が当時すでにみられたのであろう。とすれば、本図の人物表現と十三まいりを中心として結びつける必要もないように思われる。

以上の検討から、法輪寺参詣曼茶羅の作成年代は近世初期の慶長年間とみてよからう。ただ、本図は表現技法の面からみると、清水寺や成相寺の参詣曼茶羅にみられるような一種、土俗的・庶民的な描法に比べると、どこことなく上品さの漂う画面となっている。美術史的にみれば、洛中洛外図や名所図により近い表現となっており、作成にあたった絵師・工房についても検討を深める必要がある。

本図には徳田和夫氏が指摘された本堂前の賢女こぎ（注12）（あるいは巫女）や、福原敏男氏が注目された仁王門前を左に進む念仏聖（注13）（『都名所図会』に「天慶の頃、空也上人ここに住みて旧寺を修造し、念仏常行堂とす」との記事があり、図中の聖も口から六字名号を吐き、鹿角杖らしきものを持つており、空也像を想い起こさせる）等の図像がみられるが、本稿では提起しておくにとどめたい。

本図は他の多くの参詣曼茶羅と同様、軸装の際に、若干上下左右端をカットされた痕跡が認められる。本図の上方には日輪、月輪が描かれていないが、法輪寺には道昌の故事にちなんだ明星井道昌がこの井で垢離こりをとった時、星がくだけ散ったといわれ、井の上に社をたてて明星天を祀る）が

あり、善峰寺参詣曼茶羅に日輪、月輪とともに描かれている金星かと思われる星が軸装前には描かれていたのではなからうかと憶測するのは考えすぎだろうか。

このように、作成年代の明らかでない参詣曼茶羅の場合も、中世後期の洛中洛外図や近世の名所図会等と比較検討することによって前後関係を明らかにすることが可能となる。

なお、このたび、戦時中に刊行された先駆的な幻の名著である『神社古図集』が臨川書店より復刻された。これを契機に、いつそう絵図研究が進展することを期待したい。

（いわはなみちあき「人文地理学」）

注

（1） 中村雅俊『虚空蔵信仰の研究』 御影史学研究会、一九七八年。

（2） 難波田徹「京都府下の社寺参詣曼茶羅図」『文化財報』三四、京都府文化財保護基金、一九八一年。赤井達郎編『京都千年 寺と社』講談社、一九八四年。

(3) 大阪市立博物館編 『社寺参詣曼荼羅』 平凡社、一九八七年。

(4) 前掲注(3) 参照。

(5) 前掲注(3) 参照。ただし、水車の記号が存在する仮製二万分の一地形図の「愛宕山」

図幅(明治二十二年測量)では残念ながら、この位置に水車が存在することは確認できない。なお、桂川用水については、黒田日出男「中世農業と水論」『絵図にみる荘園の世界』 東京大学出版会、一九八七年、参照。

(6) 『日本屏風絵集成九 四季景物』 講談社、一九七七年。

(7) 『京都の歴史五 近世の展開』 学芸書林、一九七二年。

(8) 前掲注(7) 参照。

(9) 瀬田勝哉「失われた五条橋中島 洛中洛外図を読む」『月刊百科』 平凡社、一九八八年二月号。

(10) 『日本歴史地名大系二七 京都市の地名』 平凡社、一九七九年。なお、『御触書集成十八』延享二年四月条に、法論寺の堂舎破損に際しての諸国勧化の記事がみえ(平岡定海『日本寺院史の研究中世近世編』 吉川

弘文館、一九八八年)、図2は延享以降の境内の表現である可能性が強い。また、この諸国勧化の際に、十三まいりの信仰が流布されたとも考えられる。

(11) 前掲注(1) 参照。

(12) 徳田和夫「中世の目、中世の耳」『国文学解 釈と教材の研究』 三三一七、一九八七年。

(13) 前掲注(3) 参照。